



▲破壊された町道
 (「証言 あの日を忘れない」平成16年香川県土砂災害の記録より引用)

背景

平成16年(2004)9月の台風21号の影響により、28日夜から香川県内全域で雨が降り始め、翌29日夕方には気象台から県下全域に大雨・洪水警報が発表されました。台風が最も接近した19時前後には、観音寺市栗井で1時間に66mm、観音寺市大野原町で65mmの非常に激しい雨が降りました。この話は、当時消防団長として台風を体験した人の証言です。

アクセス

災害現場付近(大西川にかかるJRの橋)

- JR箕浦駅より西南西に約800m
- 観音寺市豊浜町箕浦
- 緯度経度 北緯34度02分39秒, 東経133度36分43秒



平成一六年(二〇〇四)に観音寺市を襲った台風豪雨では、あつという間に川の水位が上がりました。今にも川の堤防を越えそうな勢いです。消防団は急いで土のうをつくりに出かけました。「恐ろしい、堤防が揺れている。こんな洪水は初めてだ」と一人が叫びました。確かに洪水の力で河川堤防が振動しています。そんな中で力を合わせて何とか土のうを積みあげました。

「土のうで洪水を防げそうだ。とりあえず、これで一安心だ」という安堵(あんど)の声がする一方で、「流木が橋にひっかかりそうだ。大変だ」との叫び声が上がりました。確かに洪水に混じって沢山の流木が流れています。山の斜面が壊れた際に土砂とともに倒れた樹木が土石流と一緒に流れてきているのです。あつという間に橋が流木で塞が(ふさ)れてしまいました。そして、次から次に流木が引っかかって自然のダムが出来上がりました。

「危ないぞ。橋の両岸から水があふれるぞ」との声が上がったと思うと、濁流(だくりゅう)が荒れ狂ったように流れ出しました。川の両岸を越えた濁流は一気に家に流れ込んで、すさまじい破壊力で家々を壊してしまいました。

「最近山の手入れをしないから、洪水がひどいな」と消防団員の一人、「そうだな、保水力もないし、樹木の根の張りが悪いから山が壊れやすい。沢山の流木が洪水災害を引き起こすし、山の手入れが必要だな」ともう一人の声。今まで経験したことがないような凄まじい自然の猛威(もうい)を目の当たり(ま)にして、治山治水の重要性(じゅうせいの)を痛感(つうかん)させられました。



背景

平成16年(2004)9月29日に鹿児島県に上陸した台風21号は、四国を通過し、近畿、北陸、東北と日本を縦断しながら各地に被害をもたらしました。香川県内では29日午後、台風本体の雨雲がかかり始め、19時前後には観音寺市などを中心に時間雨量が60mmを超える豪雨となりました。この豪雨により県内各地で土石流などによる土砂災害が発生し、家屋や農地等に甚大な被害が出ました。しかし、死者、負傷者等の人的被害はありませんでした。この話は、当時消防団長として危険箇所の住民の避難誘導に関わった人の証言です。

アクセス 砂防堰堤群 (大野原地区)

- JR豊浜駅より東南東へ直線距離約5km
- 観音寺市大野原町萩原地区
- 緯度経度 北緯34度03分45秒, 東経133度40分27秒



平成一六年(二〇〇四)台風二一号を消防団長として経験した人の話です。土石流の危険性のあるところで生活している住民には、役場から自治会長に連絡を入れるなどして避難するよう促しました。ほとんどの住民は指示に従ってくれましたが、避難してもらえない人が一〇人くらいいました。再度、自治会長さんが連絡してくれたり、地元の消防団員が行ったりして説得したのですが、最後の一人は説得に応じようとしなないと連絡がありました。

「心配せんでもええ。この土地に何十年住んどると思うんや。ここの地形などは、わしはよう知つとるんや。お前ら下から来た者が何を言よんぞ。わしは残つて自分の家を守るんや」と、いくら説得してもだめだとのことでした。そこで、私が直接、家に行つて説得に当たりました。「言われることも、家を守りたい気持ちも本当によく分かります。でも、今度の台風はもの凄い雨を降らせませす。土石流が出たら逃げられませんで、何とか避難して頂けませんか」と一〇分か一五分くらい話しました。それでも応じてもらえないので、最後には土下座してお願いし、何とか避難していただきました。

日本全国でいろいろな災害が起きていると新聞等で見聞きしても、それはよその事で、ずっと昔から災害等のない土地なので危機意識がなかったのです。今でも実際に中位の土石流に遭つた経験のある人でも危機意識は低い。この前は、ここまでで止まって被害がなかったのだから、次回もそこまでは心配ないだろうと思つている人がいるのです。

まず避難勧告を住民が守ってくれることが一番だと思います。



背景

平成16年(2004)10月19日、台風23号の接近に伴い^{あきさめ}秋雨前線が活発化して雨が降り始めました。一旦は小康^{しょうこう}状態になりましたが、20日朝から夕方にかけて台風本体の雨雲により豪雨となりました。この大雨により香川県内各地で土砂災害、河川の氾濫などの被害が発生し、死者11名、全半壊家屋405棟などの大災害となりました。この話は、土砂が牛舎に入り込み、地域の人々が埋まった牛の救出に努力するという話です。

アクセス 災害現場付近(山脇集会場)

- JR讃岐財田駅より南東へ直線距離約1km
- まんのう町山脇
- 緯度経度 北緯34度07分18秒, 東経133度49分21秒



「警報が出たけん、避難せい」そう言っても、酪農家は牛が心配なので、「おる」と言っていました。牛が家計の収入源ですから。

平成一六年(二〇〇四)台風二三号の記録的な豪雨により、かつて国有林を買収して高度成長時代にミカンを植えた農地が崩れました。その下には酪農家があり、牛舎と新築の家を構えていましたが、牛舎が土砂にやられてしまいました。

翌日、うちの自治会は六〇何戸あるのですが、全部召集して、とにかく牛を助けられないかんからと、五〇人ぐらいで、人間への危険性がない範囲でこの日にやれることはやっただけです。

かわいそうに、牛は土砂の中に四本足で埋まってるじゃないですか。腹までつかえていました。手がつけられる状態ではありませんでした。助けられないのです。小さい機械やらウンボを持ってきて、土砂をのけ、後は手作業でのけて、二時ぐらいまでかかりました。

一頭は救出したときには生きていたのですが、足が折れたとかで、残念でしたが屠殺場に送りました。鉄骨の牛舎だったので、歪^{ゆが}ただけで、壊れませんでした。鉄骨がなければ住家も被災していたと思います。住んでおられた方は、「恐ろしい、もうあないとここに住みたくない」と言っていました。



▲子どもたちの植樹



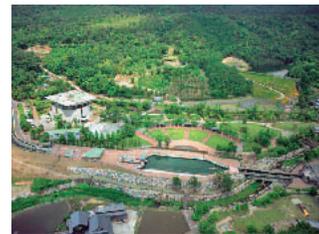
▲早明浦ダム

背景

平成6年(1994)は異常な^{かつすい}渇水の年でした。^{りょうなん}綾南町では、水不足の危機的な状況の中で、無形文化財としてではなく、真剣に雨の到来を祈念して滝宮天満宮で念仏踊りの^{ほうのう}奉納が行われるほどでした。また、町民は、町の呼びかけに応じて連帯して懸命に節水に努力しました。大渇水をしのぐことができた要因の一つとして、綾南町では、こうした町民の努力の他に、先人が築いたダムと用水路による「命の水」があったことを伝えています。

アクセス 香川用水記念公園

- 国道32号道の駅「たからだの里さいた」より西南西へ直線距離約3km
- 三豊市財田町財田中2355
- 緯度経度 北緯34度06分01秒, 東経133度45分51秒



平成六年(一九九四)は歴史的な渇水の年でした。
 七月二日の梅雨明け以降、^{りょうなん}綾南町(現在の綾川町)の町民は、^{もうれつ}猛烈な暑さと異常な渇水のため^{しやうそうかん}焦燥感を感じていました。七月二四日に^{さめうら}早明浦ダムの貯水率はゼロとなり、別枠の発電用の用水に頼ることになりました。二日後に台風七号の接近により^{じゆう}慈雨がもたらされ、貯水率は三一パーセントにまで回復しましたが、その後再び貯水率は低下し、危機的な状況となりました。この危機を救ったのが八月一六日の台風一四号と九月三〇日の台風二六号でした。
 この歴史的な大渇水を乗り切ることができた要因の一つは、香川用水が命の水を送り続けてくれたことです。渇水に心をいためた期間、住民は、毎日テレビに映し出される早明浦ダムの風景を食い入るように見つめていました。あのダムに残された水だけが、香川県の、そして綾南町の住民の命を支えてくれていたからです。台風によって早明浦ダムに勢いよく流れ込む水を見て^{かんせい}歓声を上げるような気持ちとともに、今更ながら、先人の果たした偉業に^{きょうたん}驚嘆する思いでした。「四国は一つ」の言葉を実感したものでした。
 この年以降、香川県の中学一年生は、遠足に香川用水関連施設を見学することが^{こうれい}恒例となり、早明浦ダム周辺に中学生の手で植樹を実施するような風景も見られるようになりました。



▲萱原用水を導水した大羽茂池



▲大久保大明神

背景

萱原用水は、綾川町正末で綾川の水を取り入れ、大羽茂池に達する14kmの用水で、綾川町萱原周辺の灌漑用水源です。かつてこの辺りは干害に苦しめられることが多く、特に元禄10年（1697）から連続して干害に見舞われ、元禄14年（1701）には270人が餓死しそうになったそうです。この窮状を救うために奮闘したのが、萱原村の庄屋であった久保太郎右衛門です。大正9年（1919）に建立された太郎右衛門の彰徳碑は、今日も地域の人々に大切にされています。

アクセス 萱原用水の碑

- 琴電琴平線滝宮駅より東へ直線距離約1km
- 綾川町萱原
- 緯度経度 北緯34度14分46秒，東経133度55分50秒



萱原周辺は水利の便が悪く、用水確保に苦勞していました。このため、ため池が多く築かれ、水田が開かれていましたが、日照りがあると稲は立ち枯れになることもありましたが、

久保太郎右衛門は、延宝四年（一六七六）萱原村（現在の綾川町萱原付近）に生まれ、二〇歳で庄屋になった人です。太郎右衛門は、農民の苦しみを何とかして救済しようとして、綾川の水を水路に入れ、多くの溜池に注ぐことを考えました。自ら測量をし、山田村（現在の綾川町山田付近）の正末から大羽茂池に達する水路の計画を立てました。

この計画を高松藩庁に願ひ出しましたが、許可はすぐには出ませんでした。重ねて願ひをしていると、太郎右衛門が二八歳の元禄一六年（一七〇三）、一部について許可が出て、数ヶ月で工事を完成しました。しかし、水は池に届かなかつたので、藩主に直訴してもとの計画を認めるよう嘆願しました。そこで太郎右衛門は捕らわれ、投獄されました。

太郎右衛門の妻は金比羅さんにお参りし、太郎右衛門を父母のように慕っていた村人も釈放を懇願しました。釈放後、太郎右衛門は藩老に水路計画の事情を涙ながらに訴え、その志に藩老は感激して、宝永四年（二七〇七）、太郎右衛門に許可が下りました。太郎右衛門は早速用水取り入れ口からの水路の工事にかかり、その年のうちに完成しました。三二歳でした。

この萱原用水の完成によって、村々は綾川の恵みに浴することになり、開拓も進みました。



▲高塚山から新池を望む

背景

高松市香川町の新池では、旧暦の8月3日に実った農作物でおどけた姿をつくり、新池までの道を練り歩き、最後は皆がため池に飛び込むという「ひょうげまつり」があります。「ひょうげまつり」とはひょうきんまつりという意味で、昔、地域の人々のために新池をつくった矢延平六のご恩に報いるためのお祭りです。香川県の無形文化財に指定されています。新池を見下ろす高塚山には、矢延平六を祀った新池神社があります。

アクセス 新池神社 (高塚山)

- JR高松駅より南へ直線距離約12km
- 高松市香川町浅野
- 緯度経度 北緯34度14分54秒, 東経134度02分57秒



旧浅野村一帯（現在の高松市香川町浅野地区）は稲作りに必要な灌漑用水が少なく、干ばつに悩まされることがたびたびでした。村人たちはため池をつくる計画を立て、藩に願い出ました。その陣頭に立つて指図をしたのが矢延平六でした。平六は、村の西を流れる香東川の水を引き入れることを考え、多くの人々が力を合わせ、ついに新池という大きなため池を築きました。村人は喜び、平六は村人たちに心から慕われていました。

しかし、世の中はままならず、「新池を造ったのは高松城を水攻めにするためのもの」などといううわさが広まりました。このため、平六は八月三日、裸馬にのせられて阿波国へ追放の身となりました。

恩人を慕う村人たちは八方手を尽くし、平六を探し求めましたが姿を見付けることはできませんでした。そこで、平六のご恩に報いるため、高塚山に平六を祀り、巡りくる収穫期ごとに祭りをを行い、追慕の念を高めてきたのです。

この祭りは古くから浅野地区の人々によって継承されており、神具はすべて農作物や家庭用品などを中心に整えられています。



昭和一四年（一九三九）は大干ばつに見舞われました。高松市川島地区では、四箇池しつかいけの潤す田以外では田植えのできなかつた田もありました。また、田植えのできた田地も、八月中旬ごろから溜池なみいけの水が底をつき、稲田は真っ白になり、地面は亀の甲のように割れてきました。見るに見かねた農家の人は、出水や四箇池の水路から夜を徹して水を汲み上げ、出穂前の稲を助けようと懸命の努力をしました。ポンプ用のガソリンも不足し、共同で円座・仏生山ぶつしょうざん・平井まで買いに歩きましたが、その労も実らず、高台では四分の一の収穫しか得られませんでした。

七月二三日には、香川県の藤岡長敏知事が、自ら祭主となって滝宮天満宮で雨乞い祈願をし、八月一日より三日間、城山神社でも降雨祈願をしました。また、県は各市町村に対し、雨乞いをするよう通達を出しました。由良山・土佐山でも三度ほど雨乞いの火を上げました。九月には、学童が日の出と日没前に土びんで稲に水をかけるよう、各学校へ通達を出したほどです。

この年の米の収穫量は、県で平年一三万七、八〇〇トンのところ、五四パーセントの七万四、六〇〇トンしかありませんでした。農家では、供出米が納められず、保有米もなく、苦しい生活を余儀なくされました。県では一〇月、白米食の廃止はいし、七分づき米の常用・雑穀との混食ざっく・粉食こな励行、麦食奨励の条例を制定したほどで、米価は急激きうきくに高騰こうとうしました。



背景

昭和13年（1938）10月から14年9月までの1年間の雨量は、675.7mm（多度津測候所）で、例年の約半分に過ぎませんでした。高松市川島地区では6月14日未明に少し降ってからは空梅雨の状態、9月11日まで雨らしい雨がありませんでした。このため、県知事が雨乞い祈願をするとともに、県は学童に対して「土びん」で朝と晩に稲の根元に水をかけるよう学校に通達を出したほどでした。

アクセス 滝宮神社

- 琴電琴平線滝宮駅より西へ直線距離約300m
- 綾川町滝宮
- 緯度経度 北緯34度14分59秒，東経133度55分09秒





▲香水箱

背景

四国の中でも特に雨が少ない香川県では、現在のように香川用水ができて吉野川から水が供給されるまでは、満濃池に代表されるため池が多く造られ、水不足に備えていました。池の水が少なくなると、たいていの土地では、できるだけ渇水被害を小さくするため、池の水を順番に配水していく「番水」が行われていました。しかし、時計のない時代に、公平に田に水を引くためには工夫が必要でした。そこで使われたのが「香箱」です。香箱で線香を燃やして、決めた長さごとに太鼓で合図をして引水を交代していたのです。

アクセス 平池

- JR高松駅より南へ直線距離約9km
- 高松市仏生山町
- 緯度経度 北緯34度16分17秒, 東経134度02分43秒



時計のない時代に、少ない水をできるだけ公平に田に引き入れるために、人々は工夫をしました。高松市の多肥では、平池の用水配分に、大正の頃まで、香を焚いて水の配分をしていました。長さ六〇センチメートル、横三五センチメートル程の香箱の中に灰をつめ、中に竹節を欠いた二つ割の竹を三個、箱の長い方に平行させて置き、その竹樋の中に線香の粉を入れ、その粉に火をつけ、その燃えて行く寸法を測定して、田の給水時間を決めたものです。

香を焚く時には、人手が最低限三人は必要でした。二人は民家において香を焚いた香箱を見つめます。時間が来ると、太鼓で合図をします。もう一人は股守（水路の切り替え）に出掛けます。これを「水ばし」または「井手ばし」と呼びました。これに当たった者は枕蚊帳などを持参して水路の端で待機をしていました。太鼓の合図にこたえて股守に出た「井手ばし」はあらかじめ持参をしている鉦をたたいて「わかった」と合図をします。そして、水路を切り替えて次の田に水を流しました。

こうして、平池の用水が流れるようになると、順番に田に水を引き入れるために、香箱の中で香を焚いたものでした。





▲高潮で浸水した高松市内
(高松市松島町国道11号)



高潮で浸水した高松市内
(高松市松島町)▶

背景

平成16年(2004)8月の台風16号では、激しい雨と大潮の満潮が重なり、記録的な高潮が香川県沿岸の各地を襲い、住宅などの建物は浸水被害に見舞われました。高松港では観測史上最高の2.46mの潮位を記録するなど、県内各地で最高潮位を更新しました。この結果、高松市を中心に、床上・床下浸水が約22,000戸と戦後最大となりました。

この災害で、多くの方が高松市など瀬戸内海沿岸部の土地が高潮に弱い大地であることを認識し防災を考えるきっかけになりました。

アクセス 浸水現場(旧四国地方整備局前)

- JR高松駅より東南東へ直線距離約2km
- 高松市福岡町4-26-32
- 緯度経度 北緯34度20分28秒, 東経134度04分03秒



平成一六年(二〇〇四)は古来稀まれにみる年で、台風が日本に一〇個、四国には六個も上陸し、瀬戸内海側の香川県、愛媛県でも大きな被害を受けました。中でも台風一六号の際には、香川県においては台風通過が大潮の満潮時刻と重なったため、これまで記録されていた最高潮位を五〇センチメートル超える未曾有の高潮が発生し、高松の中心街など約二万二、〇〇〇戸が浸水しました。その時、消防署員として救出活動たすけに携たずわった人の証言です。

台風一六号では警報発令後、日新小学校区へ急行しました。その時の光景は忘れられません。「なぜこんなことが」と思うほど壮絶そうぜつで、道路を水が流れる中、現状確認に行こうとするのですが、手すりにつかまっても足元がすくわれて押し戻される状態でした。各家庭を回って小さなお子さんやお年寄りを抱えて安全なところまで誘導するにも深夜で何も見えず、危険でした。一軒一軒確認しながら取り残された人たちの救助するのは、とにかく時間がかかります。消防では太刀打ちたちうちできない災害があることを実感しました。

大災害になればなるほど被害は甚大じんたいで、すぐに救助に向かえない場合もあります。どの家に取り残されている人がいるという情報があるかないかで、救助までのスピードが違います。被害を最小限に抑おさえるために、また二次三次の被害を招まねかないために、地域と連携をとっていかなければと痛感しました。



▲現在の五剣山



▲宝永南海地震以前の五剣山の山容
〔四国霊場記〕より引用

背景

南海地震、東南海地震、東海地震の3つの地震が同時に起こった日本史上最大といわれるM8.6の宝永地震の大きさを象徴する痕跡こんせきが香川県内で有名な山に残っています。

それが、私たちが普段見慣れている五剣山で、宝永地震により東の峯が崩れて、今では「四剣山」になっています。今後30年間で高い確率で発生するという東南海・南海地震も、我が国で発生する最大級の地震であり、その地震動による被害は、香川県でもこのような甚大じんたいなものになると想定されています。

アクセス 五剣山

- 琴電志度線六万寺駅より北へ直線距離約2km
- 高松市庵治町・牟礼町
- 緯度経度 北緯34度21分41秒, 東経134度08分27秒



香川県高松市牟礼町に空海が唐に渡る前、八つの栗を埋めたことから命名された四国霊場第八十五番札所・八栗寺やぶりじがあります。この八栗寺の背面にそびえる山は、もともと五つの峯があることから「五剣山」と名付けられていました。

宝永四年（一七〇七）は天変地異の多い年でした。三月一日には大地震が発生し、七月一日にはほうき星が月を横切りました。八月二日に大雨、一七、八日は大風雨で洪水、一九日は大風でした。九月二日は大洪水で、庵治の海岸の堤防が切れ、家が倒れ、田畑が流れました。そして、一〇月四日のことです。旧暦の一〇月は今の十一月頃ですが、それなのにこの日は大変暑く、人々は着物を脱ぎ、笠をかぶって綿を摘んだり、稲を刈ったりしていました。

午後二時頃大地震があり、地鳴りは雷のようで、地は裂け、水が湧きだし、浜辺の砂地は音を立てて揺れました。五剣山の東の端、庵治から左の端に見えていた峯が崩れ落ち、その音は二〇キロメートル余り遠くまで聞こえました。家は倒れ、塀が壊れ、井筒が跳び出ました。その上、二メートルほど津波が押し寄せたので、海岸一帯は潮に洗われました。

地震がいつまでも続き、人々は「また大地震が来る、大津波が来る」と言って、山や藪やぶの中に小屋をつくって暮らしました。一〇月二三日には富士山が噴火して宝永山ができました。

八栗寺はこの地震で大破し、二年後に全部改築して、ほぼ現在の姿になりました。



▲ 搜索活動の状況
(提供：小豆島町) ▶



背景

昭和51年（1976）9月の台風17号による集中豪雨は、香川県全域に被害をもたらしました。その中でも、小豆島町池田の四方指観測所では9月8日12時から9月13日15時までに1,400mmという1年分に匹敵する降雨量を記録しました。この豪雨により、随所で土砂災害が起こり、小豆島町池田の谷尻地区で24名の死者を出すなど、県内各地で合わせて死者50名にのぼる大災害となりました。

アクセス

災害現場付近（砂防ダム(蒲野地区)）

- 小豆島町役場池田庁舎より南南東へ直線距離約5 km
- 小豆島町蒲野地区
- 緯度経度 北緯34度26分25秒，東経134度15分01秒



昭和五十一年（一九七六）の台風一七号の時、地区総代として土砂災害を経験した人の証言です。たたきつけるような豪雨の中で、「土石流が起こった。家がつぶされ、多くの人たちが生き埋めになっているかもしれない」との第一報が入ったのに続いて、土石流災害発生のお知らせが次々に入ってきます。小豆島の全ての沢という沢で土石流が発生してしまったのではという感じさえ受けるほどです。想像も付かない、とんでもない規模の土砂災害が発生したということだけは分かりました。しかし、各種の情報が入り乱れる中、どれだけの人達が犠牲になっているのか正確な人数さえ分かりません。とにかく行方不明者の搜索を急がなければいけません。そこで、陸海自衛隊、県警機動隊、消防団員、その他、地元自治会など各方面に緊急の協力依頼をしました。

行方不明者の搜索は困難を極めました。土石流で流れ出した大量の土砂はドロドロの状態で堆積（たいせき）しています。そのため膝（ひざ）までぬかるんで、歩くのがやつとの状況です。それでも一刻も早く全員が発見されることを一心に願いながら一生懸命に搜索に取り組みました。そして、「おうい、最後の一人が見つかったぞ」という声が響いたときには、「疲労困憊（こんぱい）の中で皆が心から手を合わせました。「見つかって本当に良かった、この感慨は一生忘れることができない」と誰とはなしに口をついて出ていました。

小豆島は瀬戸内海に浮かぶ風光明媚（めいび）な島で、壺井栄の小説「二十四の瞳」の舞台となったところとしても有名です。典型的な瀬戸内海気候で豪雨災害の発生など考えられない小豆島で、これだけの規模の土砂災害が起こったことは、三〇年経った今でも信じられないことです。



背景

昭和51年（1976）9月、台風17号は小豆島に年間降雨量に匹敵する1,400mmもの豪雨をもたらしました。香川県全域の被害は、死者50名、重軽傷者127名、家屋の全壊274戸、半壊317戸、床上浸水4,477戸、床下浸水15,224戸にのぼりました。この話は、小豆島の小豆島町の小学校5年生の女子が体験した3日間の台風記録です。子どもの視点で、台風の怖さと助かった時の感動が記されています。

アクセス

小豆島町役場

- 小豆島町役場内海庁舎
- 小豆島町内海
- 緯度経度 北緯34度28分42秒，東経134度18分54秒



昭和五十一年（一九七六）台風一七号が来たときの話です。

九月一日の朝、雨の中、隣のおじさんが大声で「上流の公民館が流れてくるぞーっ！」とみんなに知らせにきました。私とお姉さんは、何も持たず、犬二匹を連れて、急いで避難しました。お母さんはお金を持って後から逃げて来ました。お父さんは消防へ行っていました。私たちは黒島のおばちゃんおばちゃんの所へ避難をするのです。停電なので真っ暗な中を、雷は鳴るし雨は降るし、とっても怖かったです。私とお姉さんはびっちゃんちゃんになりながら、犬を必死に抱いて逃げました。何かにつまずいて転んだ私にお姉さんが「何しよん、早よ立ち、早よっ」ときつくいいました。お姉さんがあんなにきつく言ったことはあまりなかったので、私はびっくりしてすぐ立ち上がりました。

一二日朝、雨が小降りになったので、私とお姉さんとお父さんとで家へ大事な荷物を取りに帰りました。すると家の中は、水と土が膝の少し上まで来ていました。

夜、ごはんを食べた後、ローソクの下で、大人の人たちは死ぬことばかり言っていました。「もう最期やから賑にぎやかにいかんか」などと言っています。お姉さんは、「どうせ死ぬんやったら」と言ってよそ行きの服を着て寝ました。私は死にたくないと思いました。お父さんはお酒をたくさん飲んで、「どうせ死ぬんやったら、ぐっすり寝てなんにもわからずに死にたい、苦しみの中で死にたくない」と言っていました。そんな話が続いて、とうとう夜が明けました。

「うわっ、助かった！」誰もが言いました。太陽が光り「ああ助かったんやなあ」と思いました。家を流されたり、つぶされた人もいます。亡くなった人もいます。とても恐ろしい三日間でした。



昭和四九年（一九七四）の台風八号の時、消防署員として、次から次へと土砂災害の悲惨な現場を目の当たりにしながら、土砂に埋まった人の救出に当たった人の証言です。

「生き埋めがおるから来てくれ！」との大声で最初に向かった現場は、たちばな橋地区の斜面に建つ住宅密集地でした。現場は上方より幅五〇メートルにわたり原型を止めず流失し全壊していました。付近一帯にガスが漂い、汚物の激臭げきしゅうが鼻を突く中、急な斜面を不明者が多くいると思われる上方を目指し駆け登りました。

ようやく私たちが辿り着いた最高所の家は半壊し、この家の上方にあった数軒の民家の残骸の一部がもたれかかっていました。地元の人々が必死に救出作業を続ける家の合間から、うめき声が聞こえました。キャツプライトの光に入ったものは、土塊と化した被災者の姿でした。二畳くらいの場所に木と土砂に埋もれ二人の重傷者が出ており、その二人に重なり合うように骨折し、流血した遺体がありました。私たちは地元の人々と共に必死に救助作業を続けるとともに、無線で医師の要請ようせいをしました。

そして、私たちは息つく間もなく次の現場へ向かいました。土砂の撤去てつきよ作業を開始しましたが、根がついたままの大木と土砂に埋もれた石に、作業は難航を重ねました。しばらくして隊員の一人が水浸しの土砂の中から手指の一部を見つけ、早速発掘にかかりました。作業が進むにつれてやや横向きの遺体は徐々に全容を現しましたが、木と石にはさまれた遺体を傷つけないよう気づかい、素手での作業が主となり大変難航しました。

すぐ横で変わりはてた母親を待つ女子高生の手には真新しい毛布が用意され、取りみだすことのないその姿があまりにも痛々しく映りました。



背景

昭和49年（1974）7月6日夜、台風8号による集中豪雨が小豆島一帯を襲い、大きな被害をもたらしました。小豆島町橋地区、福田地区、岩ヶ谷地区等では死者29名、重軽傷者21名、家屋の全半壊249棟という大惨事に見舞われました。

アクセス 砂防堰堤（橋地区）

- 小豆島町役場内海庁舎より東北東へ直線距離約3km
- 小豆島町橋
- 緯度経度 北緯34度29分28秒，東経134度20分25秒





▲白川原池

背景

香川県さぬき市志度町に白川原池というため池があります。300年以上も前に、庄屋が村人のためを思い、腹切り問答の末、藩から築堤の許可を得て完成させた池です。そして、この庄屋に感謝して、干ばつ時にも庄屋家の田だけは水を絶えさせまいと、村人たちが築いた小さなため池があります。能徳池と言います。二つのため池は今も立派に機能し、ため池をめぐる人々の思いやりの心を伝えています。

アクセス 能徳池

- 津田寒川ICより北へ直線距離約3km
- さぬき市志度町鴨部
- 緯度経度 北緯34度19分15秒，東経134度13分55秒



村の庄屋矢田助右衛門は、深谷川という谷に土手を築いて水を溜め、下流の未開拓地に五〇町歩の水田をつくる計画を立てました。これを時の高松藩主に許可を歎願したところ、普請奉行が下検分の結果、築堤付近の岩盤はその肌が傾斜しているから貯水が無理であるという理由で許可になりませんでした。

検分使が帰った後で、諦めかねて助右衛門は、意を決して裸馬に跨り役人の後を追いました。やっと屋島付近で追いついて重ねて心情を訴え許可を歎願しました。その時いわゆる腹切り問答がなされました。それは、「もし水を溜めることができなければ、腹かき切つて詫びる」というものでした。この自信と決意が通じて工事はついに許可されました。

助右衛門は悲壮な覚悟で工事に着手しました。工事は至難な大工事でしたが、命をかけた助右衛門の至誠が工事に携わる人に通じないはずはなく、監督する者もされる者も、ただ成功の一点を目指して働き抜きました。こうしてついに完成したのが今日の白川原大池です。

助右衛門の死後、この偉大な業績を讃え、末代の受益を感謝して、村人たちは助右衛門の屋敷裏に再び池を築きました。干ばつの年、白川原池が「おほらい」する前にまずこの池に導水して、矢田家所有の田だけは干ばつから守ってあげようというのです。名付けて能徳池と言います。

人々の感謝の気持ちは、地域に伝わる歌に示されています。「白川原大池干潟になると、能徳池には水絶つまいぞ」



背景

昭和62年（1987）10月17日午前零時頃、台風19号は高知県室戸市付近に上陸し、四国南東部を北東に進みました。この台風により、三木町はわずか2日足らずで年間雨量の半分近い471mmという記録的な豪雨に見舞われました。香川県は温暖な気候で、まさか三木町に災害はないと思っている人が多いため、一旦、水害が起きると、ひっきりなしに110番の電話が鳴り続けました。この災害を経験した警察官は、何でも警察に頼らざるを得ない状況に対して警鐘を鳴らしています。

アクセス 災害現場付近（大宮橋（新川））

- 琴電長尾線池戸駅より北北東へ直線距離約700m
- 三木町池戸（主要地方道小蓑前田東線）
- 緯度経度 北緯34度17分05秒，東経134度07分25秒



昭和六二年（一九八七）の台風一九号を経験した警察官の話です。

一〇月一六日一九時二〇分「暴風雨波浪洪水警報」の発表を受け、全署員を非常召集して、台風に備えました。次第に強まる風雨の中、被害の出ないことを願わずにはいられませんでした。二十一時過ぎ以後は、ひっきりなしに住民からの窮状を訴える一一〇番がかかってきました。さらに出動中の署員からの報告とあわせ、ただならぬ事態の発生を知りました。

「急に水が来てしまった。年寄りがいるんです。何とかして」

「川の堤防が切れかかっている。すぐ男の応援を」

「水が家まで入ってきた。外も水が一杯でどこも行けん。ボートを」

「橋が流され、車ごと転落したんです」

「住宅住民が避難中ですが、一名見当たらない」

普段おとなしい新川が「毒に苦しむ大蛇」のようにのたうち回り、一夜にして三木町内に大きなつめあとを残したのです。

不幸中の幸いというべきか、三木町では、一名の犠牲者も出さず、悪夢のような一夜は明けました。



背景

平成16年（2004）10月の台風23号は香川県内に大きな被害をもたらしました。県全域で死者11名、負傷者28名、家屋の全壊48戸、半壊357戸、床上浸水4,431戸、床下浸水13,336戸に及びました。この話は、さぬき市大川町で米を棚上げするために倉庫に向かおうとした人が、突然襲ってきた大水に足元をとられた時の体験談です。必死で電柱にしがみつき、人の手助けを受けて、危うく難を逃れることができました。

アクセス

災害現場付近（砂防堰堤(森行地区)）

- 大川ダムより東へ直線距離約2km
- さぬき市大川町森行地区
- 緯度経度 北緯34度13分45秒，東経134度15分51秒



平成一六年（二〇〇四）の大型の台風二三号は今までに経験したことがないような雨量をもたらしました。家の外を見れば前の畑からどんどん水が家の庭に流れ落ちてきています。「これは大変だ。倉庫に入れてある米俵が水に浸かる」という思いがとつさに脳裏を横切りました。この秋、収穫したばかりの米をまだ倉庫に貯蔵していました。まさか倉庫を水浸しにするほどの大雨があるとは思いませんでしたので棚の上にはあげていません。

家前の泥水の水位は膝の下あたりでしたので、まだ倉庫に行けると判断して、土砂降りの中を外に出ました。その時、小石をふくんだ大水が一気に流れきて、足を取られて流されました。目の前に見えた電信柱に無我夢中でしたがみつきました。

その時、「おーい、この棒をつかめ」と知人の声。差し出された棒につかまってやっとの思いで家に戻りました。「ありがとう。危なかったよ。それにしても洪水は怖い」と心から感謝しました。その後、何とか倉庫にたどり着き、米俵を階段や棚などの上に載せたときには本当にホッとしました。水に浸かったら一年間の汗の結晶が水泡に帰してしまうのです。

一晩中、雨は降り続き、家の外ではゴウゴウと音を立てて流れていて、怖くて眠れませんでした。明るくなってから、あたりを見渡して驚きました。家の裏を走っている道路は川のようになっていて、何トンもありそうな大きな岩がごろごろと転がっています。私を救ってくれた電信柱は流されて跡形もありません。電柱がなかったら今頃、洪水に流されていたであろうと思うと今更ながらゾツとしたことは言うまでもありません。

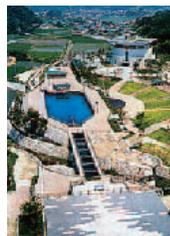


背景

眞鈴は徳島県との県境に近い香川県の山奥の集落です。この話は、日照りで水がなくて困っていたところに、お坊さんがやってきて水を所望されるので、おばあさんが快く水を差し上げると、飲まれたお坊さんが地面を杖で突き、水があふれ出てくるようになったという話です。同様の弘法大師信仰の話は四国各地にあります。今日、香川用水をめぐって県を越えた人々の複雑な感情もあると考えられますが、自然が与えた水の恵みを、県境を越え思いやりの心で分け合うことの大切さをお大師様が伝えているとも言えます。

アクセス 香川用水記念公園

- 国道32号道の駅「たからだの里さいた」より西南西へ直線距離約3km
- 三豊市財田町財田中2355
- 緯度経度 北緯34度06分01秒, 東経133度45分51秒



暑い日の盛り、讃岐の山奥に一人のお坊さんがやってきました。お坊さんは、おばあさんに「すまんことだが、お茶を一杯いただけられないものかな」と言います。おばあさんは、

「このごろは日照り続きで水は少ないのだけど、お坊さんがあがるくらいの水はあるわな」と快く水を差し出しました。おいしそうに水を飲まれたお坊さんは、

「そんなに、水が不自由なのかい」

と言いながら、杖を突いて屋敷の周りを歩かれ、ある一点で歩みを止め、地面を杖で突くと、不思議や水がどンドン湧いてきます。おばあさんは、お坊さんにお礼を申さねばと思い、辺りを見回しましたが、お坊さんの姿はもう見えませんでした。

「ありがたいことじゃ、ありがたいことじゃ」

と、おばあさんは喜びながら、水に手を入れてみました。すると、水の中で、お坊さんが持っていた鈴のよな音が「ちろん、ちろん」とかすかに響きます。眞鈴と呼ばれるようになった由来です。

隣村から、少し水を分けてくれないかと言ってきました。おばあさんは、

「水がないのは不自由なことだ。いくらでもくんでお帰りよ」

と親切そのものです。隣村といっても、県境に位置するところなので、阿波の大屋敷からも水もらいに来ました。水を担い桶(天秤棒にぶら下げて運ぶ杉と竹でできた桶)に入れて一荷にし、国境を越えて帰って行きます。そして、お礼にそば一升。水とそばを交換して仲良く暮らした山の村でした。